

# スピロの文化観： 個の多様性と「文化」の学習

## Spiro's Conception of Culture: A Thought on the Individual Differences and the Learning of Different Cultures

(1997年4月2月受理)

佐生 武彦  
SAIKI Takehiko

Key words : 記述的命題, 規範的命題, 「文化的に造られたもの(culturally constituted)」,  
「命題」の内在化, 「文化」の学習

### Abstract

Culture, as Melford E. Spiro conceptualizes, refers to a set of propositions about nature, man and society that are developed traditionally and are encoded in public signs. This conception of culture excludes both thought and behavior. This study, using Spiro's conception of culture, seeks to explain the individual differences that we witness among the people of the same cultural group. This study also explores what it means to learn the culture of other peoples, a prominent issue facing the international community today.

### はじめに

特定の文化集団に所属する諸個人の間でも多様な思考や行動が見られる場合が多々ある。同じ日本人でも「言わぬが花」を地で行くように寡黙な者もおれば、まさに「口から先に生まれ」たように多弁な者もいる。「人を見たら泥棒と思え」と自らに言い聞かせて用心深く振る舞う者もおれば、他者に対しては善意の目でしか眺めることをしない「お人好し」と呼ばれる者もいる。もちろん、この様に限りなく両極に近い人達は少数派に属するのであろうが、「典型的な日本人」が概ね架空の人物を指す言葉であることから明らかなように、同一文化に所属する人々の間でさえ多様性は常態であると言っても差し支えなからう。しかしながら、この多様性を以って「文化は個人に属する」という見解に至るべきではない。なぜならば、この見解が諸個人の思考や行動を文化と同一視するという誤謬に基づくものであるからだ。小論では、個人の多様性と文化との関係についてメル

フォード・スパイロ(Melford Spiro)の文化観に則って検討すると共に、極めて今日的な課題である「異文化を学ぶ(学習する)」とはどういう事かを考察する。

## I. 「命題」としての文化

文化概念における一つの大きな修正がギアーツ(Geertz, Clifford., 1973)によって提唱されている。文化をある社会で観察される「具体的な行動様式の複合体」とする従来の視点から、計画、処方、規則、指示等の行動を支配する制御装置としての文化という捉え方への修正である<sup>1)</sup>。スパイロの文化観も基本的にはこの「文化=プログラム説」を支持するものであり、諸個人による具体的な思考や行動を文化概念から明確に切り離す立場にある。

スパイロが提唱する「文化」とは、網状に布置し相互に連結した自然、人間、社会に関する一群の諸命題(propositions)である<sup>2)</sup>。文化とは人間が張り巡らせた「意味の蜘蛛の巣(the webs of meaning)」というギアーツのイメージを彷彿させる。これら一群の諸命題は、記述的命題(descriptive propositions)と規範的命題(normative propositions)の2種類から構成され、前者は「～は～である」または「～は～でない」という記述を含む諸命題を指し、後者は「～すべきである」または「～すべきでない」という規範を示す諸命題を意味する。「万物は流転する」などの無常観の表現は、明らかに前者に属し、私たちに一つの世界観を提示する。後者に属する例としては、「人を殺すな」というほぼ普遍的な人間の基本倫理を掲げておこう<sup>3)</sup>。但し、上に見た無常観がその論理的帰結として「物事に執着するな」という規範的命題に連結し、「非殺」という倫理がキリスト教圏においては「神が人間を造った」とする記述的命題と直結することからも分かるように、これら2種類の命題は互いに密接に関係する場合が多い。規範的命題と直接の結びつきを認め難い、独立した記述的命題の一例として、スパイロが掲げる「地球なる惑星は亀の背中に鎮座まします(the planet earth sits on the back of a turtle.)」を記しておこう。

## II. 「命題」の属性

上記2種類の諸命題には、他の非文化的命題(non-cultural propositions)とを区別する2つの属性がある。まず、記述的および規範的命題の両者は、「伝統的である」ことが揚げられる。つまり、諸命題はある社会集団の歴史的経験のなかで生成するものであり、社会化の多様な過程を通して社会的遺産として個々の成員によって獲得されるのである<sup>4)</sup>。幾世代間に亘る通時的コミュニケーションと各世代(または同時代)における共時的コミュニケーションの両者の篩にかけられ、語り/書き継がれた諸命題だけが文化を構成するのであって、個人的な経験を基に構築される命題は文化の範疇には属さない。

記述的および規範的命題は、その2つ目の属性として、「公的に記号化されたもの」に限定される<sup>5)</sup>。私たちの思考や行動を一定の方向に促す諸命題の多くが、共有の遺産である古典や神話の中

に見出せる事実がこの「公的な記号化」を証明する一例であろう。この事実は、また、当該社会に対する部外者（例えば、人類学者）によっても、文化（つまり、諸命題）の学習を容易に実現可能なものにするのである。スパイロの記述には幾分か静的な印象が漂うのであるが、個体内に内在化した文化（諸命題）も、次世代への継承に際しては、常に公的な記号（象徴）を媒介として「情報化」される必要がある<sup>6)</sup>、というよりダイナミックな視点でこの属性を捉えることも可能であろう。少なくとも世代間に受け継がれる「伝統」なる第一の属性が可能になるには、諸命題の「公的な記号化」は必然であると思われる。

### III. 「文化的に造られたもの」としての思考や行動

諸個人の思考や行動は「文化」を構成しないとするのがスパイロの文化観である。スパイロにとっての文化は、歴史的経験を通して生み出され、公的に表現された諸命題であり、具体的な思考や行動は諸個人によって「文化的に造られたもの (culturally constituted)」でしかない。ここでは、諸命題が「原因」と捉えられ、思考や行動は「結果」とみなされるのであって、両者の混同はB. ラッセルの「論理階層(logical types)」における混乱の結果とされる<sup>7)</sup>。

但し、スパイロが用いる「作者(producer)」と「作品(product)」というもう一つの比喩は、適切とは言えない。なぜなら、思考や行動の「作者」はあくまで行為者としての個人であるからだ。換言すれば、解釈機能を持つフィルターの役目を担った諸個人が、諸命題を「素材」にして、社会的なコミュニケーションの結果として「私的」な思考や行動という作品を作り出すのであって、それらが自然発生的に命題から派生することはない。「原因」と「結果」という因果律の比喩にしても、両者の間に介在する「縁」としてのコミュニケーションが認識されていなければならない。

小論での論点の一つである諸個人の思考や行動に見られる多様性は、それらが「文化的に（つまり、命題を素材にして）造られたもの」であるとする事実に起因する。この多様性は、諸個人の社会化の過程における、身近な他者（主に両親）とのコミュニケーションの量と質やその他者の性格等々からなる雑多な要素の影響による所産であると考えられる。例えば、「他人に迷惑を掛けるな」という規範的命題を飲んだくれの親父から口煩く聞かされた息子の場合、この命題の意図する明示の意味が素直に息子に伝わるかは疑わしい。むしろ息子が付与するネガティブな暗示の意味によって、命題の内容が大きく変質させられる可能性が考えられる。この様に、1) 規範的および記述的諸命題、2) これら諸命題が学習される社会的環境、及び3) 学習者としての個人からなる3要素間の相互作用によって造りだされる思考や行動は、決して画一的なものになることはない。したがって、命題自身に備わる公的な意味内容に比べると<sup>8)</sup>、諸個人が諸命題に読み込む意味内容は常により幅の広いものにならざるを得ない（図1. 参照）。

諸個人の間思考や行動の多様性を発生させる原因は他にもある。一つには、一部の人々の間で世代間に文化（諸命題）の継承が行われない場合が考えられる。諸命題の中から重要なものとそうでないものとを意図的に取捨選択した結果である場合もあれば、単なる「親の怠慢」を原因とする

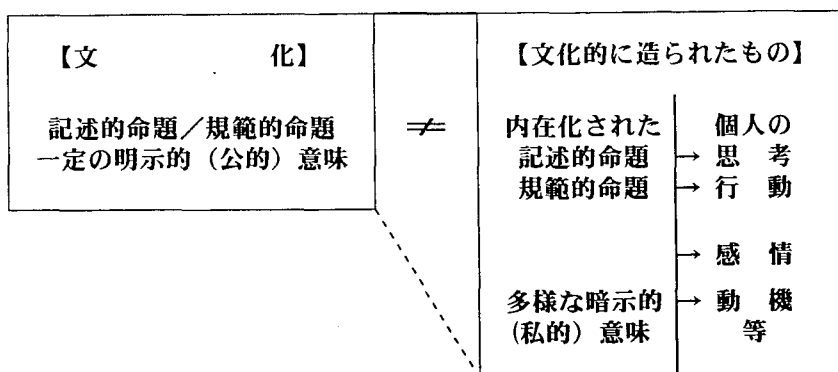


図1. スパイロの文化観

場合もあるだろう。今日の所謂「価値の多様性」などは、さしずめ親から子への文化的諸命題の継承が為されない「不安定」な状態の中で、非文化的命題としての雑多な情報が容赦無しに氾濫するところに発生する現象なのであろう。また、ルールやモラルを教えるのは父親である<sup>9)</sup>と云われるが、父権が失墜した今日の日本社会では、次世代への文化の橋渡しはますます難しくなっているように思われる。

更に、規範的命題に関して付け加えれば、「・・・ある状況でひとを拘束する規範がただひとつ、というのはむしろ例外的な場合であって、逆に二つ以上の規範が同一状況で、それぞれ別の、互いに相容れない行為を要求」<sup>10)</sup>するという黒田(1992)の意見がある。「嘘つきは泥棒のはじまり」に対する「嘘も方便」、或いは「君子危うきに近寄らず」に対する「虎穴に入らずんば虎児を得ず」というところであらうか。

急いで付け加えておく必要があるのは、同一の社会集団においては、思考や行動における多様性以上に、類似性がより多く見られるという事実である。この類似性は、言うまでもなく、一定の公的な命題を素材に諸個人が思考や行動を造り出すためであって、これまで述べてきた多様性を生み出す原因と矛盾するものではない。社会集団内における思考や行動の類似性は、集団が社会として成立する大前提（と言っても、類似性が先に存在した後に社会集団が形成されるということではなく、おそらく同時進行するのであろう）であって、多様性だけを備えた社会集団などは存在し得ないはずである。

#### IV. 命題の「内在化」

社会化の過程で文化（諸命題）の学習（概して無意識の内に）が行われるわけであるが、諸個人は「個人的な信条(personal beliefs)」として諸命題を次第に内在化させていく。この内在化の結果、命題は諸個人にとって、「真実」、「適切」、「当然」、または「善きもの」となる<sup>11)</sup>。公的な諸命題から個人的な信条へのこの変化を、スパイロは「文化化(becoming enculturated)」と呼び、

「文化の学習(learning a culture)」と区別する。内在化された記述的および規範的命題（これは上で見た「文化的に造られたもの」である）は、所謂「プログラム」として諸個人をして特定の社会的状況を一定の意味あるものと知覚させ、さらに状況に応じた適切な判断や行動を起こさせるのである。

例えば、日本人の多くは、他人から感謝の印として物を差し出された場合、内在化された規範的命題に関するプログラムを発動させ、「そんなことをして頂いてはこちらが困ります」などと言って一旦断り、「ほんの気持ちですから」などの相手からの返答（これも筋書き通りである）を聞き終えてから、少し困った様子を顔に出して「そうですか。それでは・・・」と物を納めることになる<sup>12)</sup>。「感謝の印」が両者の間を2往復するか3往復になるかは個人差による。この命題の「否定版」は、もちろん「すぐに手を出すな」となる。因みに、同様の状況における米国での規範的命題に従えば、多分に“Thank you.”の一言で片がつくか、“Oh, you shouldn’t have done that. (そんなことしなくてもいいのに)”が後に続くかのどちらかであろう。

内在化された諸命題は、諸個人に思考や行動に関する指針を与えるだけでなく、ある感情を喚起させる事実も指摘しておく必要がある。「そんな事をしたら罰があたる!!」という仏教徒の悲痛な叫びを考えてみよう。他者の罰当たりな行為を目の当たりにしたことで、例えば、燃え盛る炎等のイメージと共に内在化され、個人的な信条の一部を構成することになった「無間地獄」や他の観念（記述的命題）が、信者をして恐怖感や不安感を喚起させるのであろう。また、「未開人」が「自分がみずから知らずタブーを犯してしまったことをあとで知り得たその瞬間に、その場でたちまち呼吸を停止してしまう」ケースが報告されているが<sup>13)</sup>、内在化されたタブー（規範的諸命題）が喚起する感情の見易い一例であろうか。更に、上で見た「感謝ケース」の類似例を取り上げれば、例えば、日本語で「すみません」の一言が要求される状況で、アメリカ人に対して心からの謝意を伝えたい場合、“Thank you very much.”だけでは「何か物足りない」と感じる場合がある（この不足感も慣れるまでのことであろうが）。“I’m sorry.”と言うわけにもいかず、悶々とした経験を持つ人も少なくないはずである。規範的命題（感謝に関する）が喚起する感情が、言語的に「中途半端」な処理しか出来ない状況で顕現するケースである。

## V. 「異文化を学ぶ」とはどういうことか

「文化の学習」と「文化化」の違いについて、スパイロは非仏教徒である「仏教学者」と一般の「信者」の関係を例にとって次の様に要約する。前者は、仏教の経典や祭儀についての専門家であり、その知識の質と量において後者の比ではない。それでいて、仏教学者が経典等に示される価値や規範を自らの「個人的な信条」とすること、つまり仏教への改宗に至ることは希である。これは仏教を信仰する社会集団の中で社会化の過程を経ることがなかったために、仏典に顕わされる価値や規範を内在化させるのに必要な暗示的意味を獲得する機会を、この仏教学者が持たなかったためであると言われる<sup>13)</sup>。この仏教学者は、異文化としての仏教を「学習」したわけである。

翻って、後者の信者は、仏教的価値や規範を己の信条とする「文化化」の状態にある。換言すれば、この信者は「仏教文化」の原住民、つまりネイティブであって、内在化された仏教的諸命題によって、ある感情が自己の内に喚起され、「真実」、「正しい」または「当然」とされる思考や行動へと、己自身を駆り立てる存在である。仏教学者がこの「ある感情」を知的に理解できるとしても、自らが同様の感情を経験することはない。

上の比喩が示すように、「異文化を学ぶ」とは、仏教学者の例に倣うことであって、それ以上でもそれ以下でもない。文化を異にする社会集団が、歴史的経験の中で、取捨選択の過程を通して獲得した記述的・規範的諸命題の学習こそが、その文化を学ぶということなのである。スパイロの文化観に即して付け加えれば、「文化的に造られた」諸個人の多様な思考や行動（時に相反するものを含む）の観察からは、決して的確な文化の像を抽出することはできない。なぜならば、諸個人の思考や行動には、個人的な経験によって身につけた他の非文化的命題（異文化から学んだ諸命題等もこの範疇に入る）によって造られるものが多く含まれるからである。更に、諸命題の学習が文化を学ぶことであるとすれば、社会集団に属する諸個人の振る舞いや行動を模倣することが、「文化の学習」を意味しないことも明らかである。

## お わ り に

小論を締め括るにあたって、スパイロが提示する「文化＝命題」説が持つ今日的意義について述べておきたい。今日の国際社会において重要課題の一つとされる「異文化理解」における意義である。

諸個人の具体的な思考や行動は、諸命題を基にして「文化的に造られたもの (culturally constituted)」であり、文化の構成要素ではない。したがって、これらの思考や行動を明確に文化概念から切り離すことである、とするのがスパイロの文化観であった。「異文化理解」の文脈でこの見解を支持するとすれば（これは筆者の立場でもある）、私たちが遭遇できる限られた人々（ある文化集団に所属する）の具体的な思考や行動だけを取り上げて、その人々の「文化」を類推することは早計であり、まして「この人々の文化は〇〇だ」と評価することに余り意味があるとは思われない。スパイロの見解に立脚した場合の「異文化理解」では、常に諸命題に立ち返って、諸個人の思考や行動を吟味し、「文化」と「個性」の識別を試みるのが肝要となる。「この人の行動は、（間接的ではあれ）文化的命題を素材にして造られたものなのだろうか」という「疑問」と共に、文化相対主義が主張するものとは別の意味合いで、「判断の留保」が要請されるところである。この様な「異文化理解」を可能にする為には、実際の生身の文化交流に平行して、異文化を構成する記述的および規範的諸命題の学習が鋭意行われなければならない。個の多様性を目の当たりにして「〇〇人にもいろんな人がいる」と「達観」するだけでは、手軽なステレオタイプを用いて任意の文化集団を一纏めに評定することと同程度に、「文化」の理解からは遠い距離にある。

## 註

- 1) Geertz, Clifford. (1973). *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books, p. 44..
- 2) Spiro, Melford E. (1987). *Culture and Human Nature*, edited by Kilborne, Benjamin and Langness L.L. Chicago: The University of Chicago Press, p. 32.
- 3) この命題の様に、通文化的にはほぼ普遍的な命題を筆者は「文明」と捉える（「文化」と「文明」の違いについては拙稿「文化に関する一考察：異文化コミュニケーション論の立場から」、中国短期大学紀要 第25号, 1995年を参照）。また、「人を殺すな」等、人間社会に基本的な命題は、社会的動物としての人間の「生存」そのものに直結するため、非文化的命題の一つに属し（スパイロ）、全人類に共通する「生物学的諸命題(biological propositions)」とも考える事ができるため、明確な線引きは困難である。
- 4) Ibid., p. 32.
- 5) Ibid., p. 32.
- 6) 遠山 淳「文化の生成過程：その2－情報淘汰とコミュニケーション型－」（社会学論集、第21巻 第二号、桃山学院大学）、1988年、60頁。
- 7) Ibid., p. 34.
- 8) スパイロは、「記号は、同時に“signifier（意味するもの）”と“signified（意味されるもの）”の両者として機能する」というソシュールの考え方を支持する立場にある。
- 9) 林 道義『父権の復権』、中公新書、1996年、90頁。
- 10) 黒田 亘『行為と規範』、劉草書房、1992年、120頁。
- 11) この一連の行為を怠った場合に起こり得る相手の反応が「常識のない奴」であることを考えれば、命題としての文化とは、特定の社会集団における「ものの道理」や「常識」ということになろうか。
- 12) 竹内芳郎『文化の理論のために』、岩波書店、1980年、28頁。
- 13) Ibid., p. 36.